頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
―アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築―
報告書

中部アフリカ熱帯林住民の生活史に関する比較研究
―貨幣経済の浸透と生業戦略の多様化–

派 遣 者：大石高典
派遣期間：2013 年 1 月 21 日～1 月 29 日
派 遣 先：アメリカ合衆国・ワシントン州立大学バンクーバー校（アメリカ合衆国）

キーワード：進化と人間行動，生活史理論，狩猟採集民研究，焼畑農耕民研究，コンゴ盆地北西部

1．研究課題について

本研究では，グローバル化に伴い，生業や社会にドラスティックな変化が見られる中部アフリカの森林居住民のうち，外部社会との接触のあり方が対照的なコンゴ盆地北西部の 2 つの地域，とくにカメルーン東南部地域と中央アフリカ共和国南部地域からコンゴ共和国北東部を取り上げ，これらの地域に居住するピグミー系狩猟採集民（バカ人とアカ人）と焼畑農耕民（バクウェレ人とンガンドゥ人）について，人口動態，親族関係，土地所有，移動性，配偶者選択，産子数などについて蓄積された一次資料に基づいて，生業活動の多様化や定住化に伴うライフスタイルの変化が，彼らの生活史戦略にどのような影響を与えているのかを定量的に検討することを主眼とする。両者の最も大きな相違は，バカ人が近隣農耕民を媒介とせずに外部社会と直接交渉を始めているのに対し，アカ人の外部社会との接触は，近隣農耕民の媒介のもとに限られていることである。

2．派遣の内容

今回の派遣では，受け入れ研究者であるバリー・ヒューレット教授の研究室を訪問し，来年度に計画している米国での滞在研究における研究内容，および調査地相互訪問の具体的可能性について打ち合わせを行った。まず，滞在初日に定例研究セミナーで発表の機会を設けていただき，12 名のスタッフと博士課程大学院生の参加を得た。研究経歴について紹介の後，「カメルーン東南部の狩猟採集民バカにおける経済的不平等の発生」というタイトルで約 1 時間の講演を行い，その後約 1 時間ディスカッションを行った。滞在 2 日目以降，エドワード・ハーゲン准教授をはじめ，アフリカ研究グループに属する研究者・大学院生と個別に研究内容に関する情報・意見の交換を行い，共同研究の可能性について話し合った。滞在期間中，学部生を対象とした授業にゲスト・スピーカーとして招いていただき，「グローバルな発展と人類学」,「ジェンダーの進化人類学」という 2 つの授業でそれぞれ 1 コマずつ講義を行った。

3．派遣中の印象に残った経験や体験

米国自体への渡航が今回の派遣で 2 回目ということもあり，まず空間的スケールの日本やアフリカとの相違に驚かされた。例えば，ワシントン州立大学には，プルマンにある本校とバンクーバーにある分校の 2 つのメインキャンパスがあり，人類学部の所属教員・大学院生も 2 つの校舎に分かれて所属している。両キャンパスは，車で 5 時間以上離れており，両方に用事のあるスタッフや大学院生は移動にひ

と苦労の様子であった。今回はバンクーバー校のみを訪問したが，セミナーで研究発表を行った際には，インターネットを使ってプルマン校のメンバーにも同時中継・共有され，ディスカッションを共に行った。同じ大学内でインターネット会議を行うのも珍しくないとのことであった。

研究発表を行ったセミナーでは，教員も大学院生も非常にフランクな雰囲気で話しやすかった。アメリカでは，夕方 16 時から 19 時くらいまでの時間が「ハッピー・アワー」として飲み物や食べ物が割引設定されているレストランやパブが多い。滞在中は，セミナーやミーティングの後には都合の合うメンバーで近くのお店に集合し，このハッピー・アワーを利用して議論の続きをすることがしばしばであった。こういった雰囲気は，京大のアフリカ研究グループと似ているかもしれない。

授業では，研究内容の紹介を行った際に，多様なバックグラウンドをもつ学生から非常にたくさん質問をもらい，担当教員も交えて議論が盛り上がった。学部レベルの人類学関連の複数の授業は，スタッフだけでなくポスドクや博士課程大学院生が担っているが，講義内容に影響を受けて他学部から人類学専攻の大学院を目指すようになるものも少なくないということであった。

バンクーバーから帰りの飛行機に乗るオレゴン州のポートランド市に戻る途中で，ヒューレット教授夫妻に太平洋岸沿いにあるニューポート市の自宅に招いていただいた。海辺の静謐な環境が，アフリカの森と同じで心が大変落ち着くのだというヒューレット教授の言葉が大変印象的であった。

写真 1: ニューポート市内の港の風景。

写真 2: ポートランド市内の森林公園にて。

4. 目的の達成度や反省点

セミナーでの発表や, ヒューレット教授をはじめスタッフや大学院生とのディスカッションを通じて，本研究課題において掘り下げるべき点が明らかになり，研究の理論的展開の方向性が検討された。具体的には，カメルーンの調査地において，すでに派遣者が 10 年近い継続研究により収集してきた取得済みの一次資料（生業活動の実態，地域集団の親族関係，人口学的データ，土地利用の動態）の質と量については，高い評価が得られた。しかし，現段階ではそれぞれの資料がばらばらに整理・分析されるにとどまっていることが指摘された。研究対象の「生態」を詳細に記述することにはそれだけでも意義があるが，人間行動の進化や生活史理論といった理論研究への貢献を行うには，これらの資料を統合的に分析・検討することが欠かせない。そのためには，地域集団を構成する個人の生活史資料を軸にまとめ上げてゆく方向性が最も有力である。

次回の派遣について，新年度の始まる 9 月からの秋時期が好ましいという助言を得た。また，治安状況が許されれば, 平成 25 年度中にも中央アフリカ共和国のヒューレット教授らの調査地を短期訪問し，調査を行うことについての同意も得られた。今回の派遣の反省点としては，理論研究のレビューが不十分であるために，データ分析の具体的な課題を示すことができなかった点が挙げられるが，これは次回派遣時までの課題としたい。

5．今後の派遣における課題と目標

派遣者の研究は，より大きな文脈では，人類史における不平等の起源問題にかかわる，即時利得型の生活系から遅延利得型の生活系への転換がどのようなメカニズムで起こるのかという問題について，貢献できる可能性がある。次回の米国での在外研究までにカメルーンの調査地においてこれまで収集してきた一次資料のいっそうの整理と，一次資料間の対応づけの作業を行っておくことが必要である。並行して，これまで読み込んできた中部アフリカの狩猟採集民研究や焼畑農耕民研究に関わる文献に加え，生活史理論や進化と人間行動，認知人類学の分野の該当文献のレビューを進める必要がある。また，中央アフリカ共和国におけるアカ人とンガンドゥ人の社会を訪問し，現地調査を企画するにあたって，バカ人とバクウェレ人の社会との比較の上で有効な調査項目について検討を進めることが必要である。